

ヤマメで学ぶ地元の自然

あずま小で環境教育授業

環境省のプログラムを現場実証



ヤマメを観察するあずま小の子どもたち

りを担う人材を育てようと、環境省では2013年度から、モデルとなる55の環境教育プログラムを基に、各地の小中学校を舞台に、既存プログラムの地域化を図る事業を進めている。

この日は、あずま小の4、5年生、合わせて11人を対象に、チャウス自然体験学校代表の加藤正幸さんや両毛漁業協同組合組合長の中島淳志さんが、動画や写真などの教材を

使ってヤマメの生態を説明。ウグイやナマズ、ワカサギなど12種類の魚の写真を示しながら、「すべて近くの渡良瀬川にいる魚です」と説明すると、児童たちは「えっ」と驚きの声を上げていた。

その後、飼育しているヤマメの稚魚を改めて観察した児童たちは、「パーマークがある」と話しながら、授業で学んだサケ科の仲間の特徴を確認した。

同小4年の金子拳士さん、松島治貴さん、星野大翔さんは「パーマークという言葉初めて知った」「ナマズがいるなんて知らなかった」などと感想をもらっていた。

チャウス自然体験学校では来年1月中にもう一度、あずま小で授業を行い、教員や関係者らと内容を検証した後、地域化された環境教育プログラムにまとめる予定だ。

ヤマメを通して地域の自然を知り、地域の環境について学ぶ授業が18日、みどり市立あずま小学校（新井博介校長）で行われた。持

続可能な開発のための教育（ESD）という視点を取り入れた既存の環境教育モデルプログラムのもとに、あずま小に適応したプロ

ラムをつくるのが狙い。この日は、事業を請け負うチャウス自然体験学校をはじめ両毛漁業協同組合や県水産試験場などの有識者が

先生役となり、4、5年生を対象に、学校で飼育しているヤマメをテーマにした授業を展開した。

桐生タイムス

2015年(平成27年) 12月21日 月曜日 第18865号